
豊饒の女神

蒼太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豊饒の女神

【Nコード】

N4015G

【作者名】

蒼太郎

【あらすじ】

トンネルを越えた先は知らない世界に通じていた。日常から非日常へ。知らない世界へ迷い込んだ少年の冒険譚。

第1話：トンネルの向こう側

トンネルの向こうは不思議な国でした。

そんなことがあるのは、漫画やゲームやアニメだけ。実際は、向こうにはこちら側と同じ道路が走っているだけであるし、トンネル自体が山腹を貫く通路であるから劇的な景色の変化もあまりないはずだ。そう思っていた先程までの自分は間違っていない。いや、間違っていないはずだ。なのに、現実には「お前は間違っている」と叩きつけるように一面の花畑が広がっている。

今日は寝起きが非常によかった。学校で特に仲の良かった友人たちと山小屋を利用した泊まりがけの登山に出かけるのだ。1週間前からせっせと準備した登山用装備をつめた登山リュックサックを背負い、珍しく早起きしていた兄に見送られ、集合場所である駅を目指し家を出発したのだった。

そして、トンネルを越えた。駅行きのバスが来るバス停へ行く途中のトンネルを、越えてしまった。

「……ここ、日本？」

一面の花畑。見渡す限りの花畑。

「……こんな花、見たことない……」

ただし、その花は日本はおろか、自分がいた世界には存在しない花。

「……と、とりあえず引き返そう！ うん、そうしよう！ これは、多分

白昼夢ってやつだ！」

まわりの光景が、一面の花畑が信じられないのか、ヒカルは努めて大きく明るい声で自分に言い聞かせ、もと来た道を戻ろうと後ろを振り返り、そうして振り返った先の景色を見て愕然とした。

「は？…え…え？」

声はかすれ、本人の恐怖や不安を表すように震えて頼りなかった。おまけに掌に、背中にじつとりと汗をかき、運動をしたわけでもないのに心臓はバクバクと大きな音を立て、息は荒く、膝はかすかに震えていた。

「トンネルが…無い？」

彼が不安と恐怖を感じて体調に変調をきたしたのはほかでもない、自分がこの花畑に来るために―実際はバス停に行くためだが―通ってきたトンネルが跡形もなく消え去っていたのだ。消え去ったトンネルのあとには、辺りと同じ花が所狭しと咲いているだけだった。

「あ…えつと…どうしよう…どうしたら…っ！？」

そうして混乱した頭を落ちつけようと俯いたところでまたしても驚愕した。服が自分の胸のところで不自然に盛り上がっている。盛り上がっているのだ。―そう、まるで女性の象徴であるように。

なにか、胸に詰め物でもしてたっけ？と、現実逃避気味に考えながら、自分の胸に確かに感じるＴシャツの感触を―それも男であったときは比べ物にならないほどの密着感―頭から追い出そうとする。しかし、胸元へやった手が感じたふにっとした感触が思考を現実へと引き戻し、同時にこの胸にあるものが本物である、つまり自

分の体がーおそらくではあるがー女になっていることをヒカルに認識させた。

「うわぁ…やわらかいなぁ…本物ってさわったことないけどこんな感じなのかなぁ…」

ふにふに、ふにふにと己の胸をもみ続けるヒカル。はたから見たらただのナルシストか変態か痴女であるが、本人はいたって真面目である。トンネルの向こうが一面の花畑であったり、そのトンネルが忽然と姿を消したりと、こと理解不可能なことが立て続けに起きているため、自分の身体という極めて身近な問題に飛びつき、一時頭を冷やそうとしている…のかもしれない。

しかし、そうやった頭の休息という名の時間稼ぎや現実逃避や、若干の己の欲求を満たすための行動は唐突に終わりを迎えた。ヒカルに後ろから声がかけられたのだ。

「おお…しばらく見ぬ間に最近の娘はずいぶん破廉恥になったものだのお。…白昼堂々と己の胸をもみしだくと何事じゃ」

かけられた声は美しく、その声色はまるで小川のせせらぎのように透き通って煌めいていた。

「だ、だれだ！」

その声の美しさといきなり呼びかけられたことに驚き振り向いた。その顔は先ほどの自分の行動が見られていたという羞恥に若干の朱がさしていたが、声の主の姿を確認したところで目を見開き、口をあぐりと開けて固まってしまった。なんせその声が発せられたと思しき場所には。

「うむ。破廉恥な娘ではあるが、なかなか綺麗な面をしているの。どれ、我が直々に契約を結んでやるとしようぞ。よろこべ破廉恥娘！」

一匹の、紅毛のちまっこい犬が、ちょこなんとおすわりをしていたのだ。

第2話：泣き虫と犬

「い、いぬ？いぬがしゃべった！？え、えと…なんでえ！？」

イヌ。ネコ目イヌ科イヌ属に分類される哺乳類。その見た目の愛らしさと適切な躰を行うことで飼い主に忠実に従うその甲斐甲斐しさから、現代日本のペット産業の中で、おそらく1、2を争う人気の動物。品種によってはその高い学習能力を生かし、警察犬や盲導犬として社会に貢献しているらしい。

…学習能力が高いからって、言葉をしゃべれるようになるのだろうか？

「きぐるみってわけでもなさそうだし…あの、あんた何？」

バクバクとトンネルが無くなった時よりも高鳴る心臓と、未知なるものへの不安と恐怖と、それによる混乱でパンクしそうになる頭をなけなしの気合と根性で抑え込む。

「む。何とは失礼な破廉恥娘じゃな。…まあよい。我は精霊じゃ。火の精霊。名は…あー、100年前は何と呼ばれておったかのう？」

訳が分らん。大体何なんだ！トンネル抜けたら花畑だし！トンネル無くなってるし！女になってるし！犬は喋るし可愛いし！こつちを向いて小首を傾げる様なんて、愛らしすぎる！

「何なんだよお…もお…」

一度に色々な事がありすぎた。おまけに女性の身体になって涙腺が弱くなったのか、膝と手をつきうなだれると自然に涙が出てきた。

それを見た火の精霊は、うなだれたヒカルにおもむろに近づくと、そのちまっこく愛らしい前足をヒカルの頭に添え、やさしく語りかける。

「これこれ、泣くでない。そなたのような女子に似合うのは、涙ではなく笑顔じゃぞ？…何があつたのか、我にはとんと分らぬが、話してみてはくれぬか？」

幼子に向けるかのような、やさしさと慈しみに満ちた声。それは、ヒカルの不安と緊張で凝り固まつた心に温かく沁み渡り、解き解していく。そして、ヒカルの頭を器用に撫でていた前足をヒカルの目元に持つて行き、これまた器用に涙を拭う。

「ほれ、涙を拭って笑顔を見せるのじゃ。そうして落ち着いたら、我に話しておくれ」

その優しさが嬉しくて。

「うううう。ワン公！うわああああん」

思わず抱きついて号泣したヒカルであった。

「どれ、落ち着いたか？」

「あ、ああ、うん。ありがとな。ははっ…恥ずかしいところ見られちゃったなあ」

照れ隠しなのか、頬を軽く掻きはにかみながら答えるヒカル。泣きついたからなのか、目の前の犬が人語を解すのになんの疑いも持たなくなっていた。

「よいよい。気にするでない。それで…あー、そういえばそなたの名を聞いておらなんだ。いつまでもそなたでは少々呼びにくい。ここはまず、自己紹介を頼む」

「ああ、うん。分かった。ボクは、ボクの名前は天領光だ」

「ふむ、ヒカルというのか。良い名じゃ。それにしてもヒカルよ。最近の女子は己のことをボクなどと呼ぶのか？」

「あ、ええと、ボクは男なんだ。信じられないかもしれないけど、ちよつと聞いてほしい」

ヒカルはそう前置きをすると、トンネルを抜けた先がこの花畑であつたこと、抜けてきたトンネルが消えていたこと、自分が女の身体になつていたこと、そして目の前の火の精霊らしい犬にあつたことを順を追つて話した。

「ふむふむ。男であつたのが女になつたと申すか。不思議なこともあるものじゃ。しかし服を見るに背丈はほとんど変化しておらんよ。うじゃのう。男だつた時とあまり変わり映えはしていないのではないか？」

この犬なかなか痛いところを突いてくる。そうなのだ。多少胸とお尻まわりが窮屈になって腰回りが緩くなったことを除けばヒカルの背格好はほとんど変わっていないのだ。もともと超がつくほどの童顔かつ女顔であったため、顔の変化もあまりない。身長のうちも17歳で160cmと、同じ年ごろの男子の平均身長を10cm近く下回っており、また、女子の平均身長よりちよつとだけ高いといういでたちだった。つまりは違和感がないのだ。わずかなプライドも粉々である。

「ふむ。なるほど、異世界人か。よくあることではないが、たまにあつてな。こちらとそちらがつながって、そちらの人や物が落っこちてくるのじゃ。しかし、人が落っこちてくるのは珍しいのう…300年振りくらいじゃ」

ちよつとまで。プライドが砕かれたとか、違和感がないとかで落ち込んでる場合ではない。今、この犬はなんと言ったか。異世界とか、こつちとかそつちとか、いったい何なんだ。嫌な予感がビンビンする。背中にとりと汗をかき、喉が乾いてくる。まるで次に聞こうとしている事を邪魔しようとしているようだ。頭の片隅では、「聞くな！聞くな！」と最大音量で警鐘が鳴っている。しかし聞かねばなるまい。知っておかねばなるまい。

「あの…さ…」

警鐘を無視し、勇気を振り絞って声を出す。

「確認なんだけどさ」

目の前の、喋る犬がいる時点であり得ないことだけど。

「ここ、日本…だよね？」

僅かな希望にすがってそう尋ねた。

「ニホン？ああ、そちらの国の名か？だとしたらここは違うぞ？ここはウイスウインダムのウルガ領の北はずれにある森の中じゃ。森の名は…あー、何と言ったかのう？」

希望は木っ端微塵に打ち砕かれた。トンネル、花畑、女性化、喋る犬と来て、次は異世界。なんとなく予想はしていたがショックなことには変わらない。弱くなった涙腺の手助けもあつてか、またしても目尻に涙をためるヒカルであつた。

「これこれ、一々泣くでない。まあ、国については道すがら話として、まずは契約を行おうではないか」

「…契約？」

「人と精霊を結ぶ絆のことじゃ。これにより、人は精霊の力を借り、世界に語りかけることができる。魔法とは違うがの」

「…よく、分らないけど…えーと、なんでボクとその…契約を？」

「ふむ。理由が必要か。まあ、簡単なことじゃよ。ヒカルは我の声を聞け、我の姿が見え、我がさわる事ができるしの。それに…」

「それに？」

「泣き虫で、心配であるからの」

くつくつと、綺麗な声で囁くように笑う目の前の犬。自分より相
当ちまっくくて可愛い犬であるが、とても頼りになる犬。自分を励
まして、導いてくれる犬。そんな風にヒカルは思えた。

「へへっ…ありがとう。それで、どうやって契約ってやつをするん
だ？」

うれしくて泣きそうになるのを必死にこらえて先を促す。

「うむ。こちらに顔をよせて、額を出しておくれ」

言われたとおりに犬と目線の高さを合わせ前髪をかきあげて、額
をさらす。犬はそこに己の前足おき、一言一言つぶいた。それにし
ても、犬の足のうらとは思えないほど柔らかい。爪もないみたいで
すっごくふにふにしている。後でさわらせてもらおうかなあ…と、
煩惱に浸っていたヒカルに声が掛けられる。

「よいぞ。終わりじゃ。これで我とヒカルは一心同体。困ったこと
があれば我に頼れ。尽力いたすぞ」

「うん、ありがとう。心強いよ」

そういつて微笑むヒカル。いろんなことがあった今日初めての、
心からの微笑みだ。

「うむ。やはり」

満足げにうなずく犬。

「ヒカルには笑顔がよく似合う」

そういつてからからと笑う犬に、ヒカルは照れ隠しに頬をかくことしかできないのであった。

第3話：異世界とヒカル

「ところでさ、お前ってどんな名前なんだ？」

今更になって目の前の犬の名前を尋ねるヒカル。

「我に決まった名は無い。精霊には名など必要ないからの」

「でも、100年前は名前がどうたらって言ってなかった？」

「ふむ、それか。100年前に我を見ることができた子供がおつての。そやつが我に名をつけ、呼んでおつたのよ。まあ、100年も呼ばれておらぬからとうに忘れたがの」

「そうなんだ。じゃあさ、ボクが名前をつけていいかい？」

「おお、ヒカルが我に名をくると申すか。それはいいのう！」

ヒカルの一言に自らの尾を千切れんばかりに振り、つぶらな瞳を余すところなく輝かせる目の前の犬。…なんというか、愛らしさ大爆発である。今すぐ抱きしめて、頬擦りしたくなる衝動を懸命に抑えて、名前を考え始めるヒカル。

「そうだな、犬だし、紅毛だし…よし！紅犬なんてどうかな？」

「ふむ。末代まで崇めたいのか？」

尾を振るのをピタリと止め、目がどんどん剣呑なものになっていく目の前の犬に、ヒカルは慌てて謝った。

「う、ごめん。冗談だってば！冗談！ちゃんと考えるよ」

「そうしてほしいものじゃ」

溜息をつき、呆れた声でそういう目の前の犬に、冷汗まじりの苦笑を浮べるしかなかった。…紅犬だって、結構真面目に考えたつもりだったんだけどなあ。しかし、そんな理由では目の前の御犬様は許してくれそうもなかった。

「…犬だし、火の精霊らしいし…そうだな」

だったら。

「…サラ。なんて、どうかな？」

サラマンドーからサラ。なんとも捻りのない安直極まりないネーミングである。覚えやすくはあるが。

「サラ…か。ふむ。なかなか雅な名じゃのう。よかろう、気に入った。今から我の名はサラじゃ」

名前を気に入ってくれたことに安堵し、またしても尾を千切れんばかりに振り始めたサラにヒカルは思わず頬を緩めた。

「よし。じゃあ、改めてよろしくな。サラ。…あ、そうだ。一応聞いておくけどさ。サラは元の世界へ帰る方法…ええと、つまりボクのいた世界に行く方法ってしってる？」

「しらぬ」

即答。もう少し、せめて考えるポーズだけでもしてくれてもよかったのに。一応、ないだろうなと思いながら聞いてみたのだが、ここまでーまさしく刹那や瞬間といった感じでー否定されるとさすがに悲しいものがある。思わず脱力し、腰砕けになってうなだれそうになるのを懸命にこらえ、泣きそうになる自分を叱咤する。

そうして持ち直したあと、ヒカルは今の状況について自分なりに考えてみることにした。

…分からないことが多すぎる。

バス停へ行くために通ったトンネルはもちろんのこと、この花畑はどういった場所なのか、サラが言っていたウイスウインダムという国はどういったところなのか、精霊とはいったいなんなのか、300年前に落ちてきたという異世界人は帰ることができたのか、元の世界へ帰る方法は存在するのか、等々考えればきりがない。分らないことだらけだ。

本当にそうなのだろうか？本当に何も分からないのだろうか？
なにか、そう、なにか大切なことを見落としている気がする。今、この状況の中で無意識に理解していることがあるはずなのだ。でなければ、ここまで訝しむはずがない。…ああ、そうか。1つ、1つだけ、そう、たった1つだけではあるが、分かっていることがある。確信していることがあるではないか。それは

自分の身体が女になって、異世界にいること。

サラに言えば、何をあたりまえのことを、と言われるかもしれないが、この世界に来たことと、自分が女になってことには何か関係がある。もっと言えば、この世界と女の自分との間に何か密接な関

係があるのだ。

それが、ヒカルにどのような影響を与えるか、今は知ることはできないが、少なくとも偶然でこの世界に来たのではない。理屈ではなく、第六感的な何かがヒカルにそう確信させたのであった。

「…いずれにせよ情報が少なすぎる、か」

焦っても仕方がない。分からないことは今は放っておこう。それよりも大事なことはこの世界を知ることだ。当面はこちらで生活することになりそうだし、通貨や物の単位や使われている言語や文字など、学ばなければならぬことは山ほどある。

やるべきことの多さに少々辟易してしましそうだが、不思議と不安や恐怖といったマイナスな感情は湧いてこない。…サラのおかげだろうか。

出会って、泣きついて、励まされて、契約して、名前をつけて、と時間に見れば1時間にも満たないが、あの愛くるしい紅毛の犬にはずいぶん助けられた。サラがいなければ、今頃は途方に暮れてずっと泣いていただろう。

「…サラ、ありがとうな」

「ふふ。なんじゃいきなり」

「言っておこうと思ってさ」

「そうか。では、どういたしまして、と言っておこうかの。…それで、ヒカルよ」

「ん?」

「多少は考えが纏まったかの？」

「うん。ごめんね、いきなり黙りこくって考え事に集中しちゃってさ」

照れ隠しに頬をかくヒカル。

「よいよい。気にするでない。…さて、それではそろそろここを出るとしようかの」

「出る？」

そういつてまわりを見渡すヒカル。見えるのは相変わらず一面の花畑と吸い込まれそうに青々として空だけである。別段屋内にいるような気配はないが。

「ここはな、こちらとそちらが繋がった時にできるなごりじゃ」

「なごり？」

「うむ。ヒカルが落ちてきたところを中心に広がっている部屋みたいなものの、精霊や魔法使いなら自由に出入りできるのじゃ。放つておいてもそのうち消えるが、それを待つてやる義理もあるまい。そしてここを出れば、はれてウイスウインダムのウルガ領の北はずれにある森というわけじゃ」

「えっと、そのウイスウインダムって…」

「それは道すがら話してやると言っただであろつ。ここを出るのが先じゃ」

サラがそう言い終わらないうちに、サラの周りの空気がまるで大量の静電気を溜め込んだかのようにピリピリと緊張し始めた。やがてそれはサラの周りだけではなくには押しとどまらず、ヒカルも一緒に包み込むように広がっていった。

「しっかり立っておるのじゃぞ？」

「え？」

なぜ？と、聞こうとした矢先に風が吹き始める。はじめは弱く、肌をやさしくなでるようなそよ風であったが、徐々に強さを増して行き、ついには目を開けていられないほどの強風になった。たまらず、両手で顔を覆い身をかがめると、今度は逆に風は徐々に終息して行き、はじめとおなじようなそよ風に変わった後にすっかり止んでしまった。

恐る恐る目を開けると、そこに広がる景色は、先ほどまでの花畑とは一変して、まわりを木々に覆われた広場のような場所であった。これが先ほどサラが言っていた部屋とやらを出た場所なのだろうか。そう聞こうと思いサラがいるはずの場所を目を移してヒカルは目を見開いた。

サラは、あのちまつこくて愛らしい紅毛の犬は

「なんで？」

忽然と姿を消していた。

第4話：サラシと煩惱

どこへ行ってしまったのだろう。

慌てて周囲を見渡すが、木々の葉が触れ合う音や小鳥のさえずりが聞こえるだけで、サラと思しきものは影も形もない。

急激に押し寄せる不安。出会って間もないが、サラはすでにヒカルの中で大きな存在となっている。しばらくはこの世界について学ぼうと、この世界で生きてみよう、前向きに考えることができたのだってサラがいてくれたおかげだ。そんなサラがいなくなってしまうたら…

ヒカルはまるで母親とはぐれてしまった幼子のように目に涙を浮かべ、しかし泣くのは必死にこらえて、これからどうしようかと考えた。

「…っ」

涙がこぼれないように堪えるだけで精一杯。どうしようかなんて考えても良い案なんてちっとも浮かばず、頭の中では不安がグルグルと渦を巻いている。

「サラあ…」

誰も知らない世界で、何も知らない場所で、一人ぼっちは寂しすぎる。そんな気持ちから、誰に言うともなく呟いた言葉には、驚くことに明確な返事があった。

『ん？呼んだかの？』

「サ、サラ！？」

期待していなかった呼びかけに対する思わぬ反応に驚きは圧倒的な嬉しさに駆逐され、ヒカルはサラの姿を認めようと辺りを見るが、そこにはサラがいなくなった時と、何ら変わらない光景が広がっているだけだった。

『ヒカル、こつちじゃ』

湧き上がった歓喜が急激にしぼんで行き、再び不安が訪れようとする中で、またしてもヒカルに対するサラの呼びかけがあった。

『そなたの中じゃよ、ヒカル。我は今そなたの中にいる。我の声が直接ヒカルの頭の中に響くであろう？』

「え？えっと、ボクの中ってどういうことだ？」

『契約した精霊というのは、契約者の魔力を摂受して己の身体を具現化し、世界に何らかの影響を与えるのじゃ。』

しかし、具現するためには魔力を摂り続けなくては。そんなことをすればどんな人間であっても魔力がすぐに尽きてしまるから、普段はこうやって姿を消し、契約者の中に宿ることによって魔力の消耗を抑えておるのじゃ。あ、ちなみに今は精神がつながっているゆえ、ヒカルの言葉は口に出さぬとも思っただけで我に通じるから次からはそうするとよい』

『えっと、サラ、聞こえる？こんな感じ？』

『うむ、聞こえるぞ。そのような感じじゃ。先ほどまでのように言葉として発しておれば、周りからは独り言をぶつぶつ言っている危ない輩にしかみえぬからのう！』

こちらの不安や心配はお構いなしという様子で、からからと笑うサラ。それにしても、あらかじめ言っておいてくれてもよかったのに、と、文句の一つくらいは言ってやろうかと思ったが、サラがない不安で泣きそうになっていたことをからかわれると思い、ここはグツとこらえた。

『…話は変わるがヒカルよ。そなたの中はなんとも心地が良いのう。まるで揺籃のようじゃ』

『そ、そうなんだ』

心地よいと言われて悪い気はしない。逆にうれしくて照れ隠しに頬をかくヒカル。

『うむ。我の声も聞こえるようだし、ヒカルは精霊との相性が良いのかも知れないのう』

精霊との相性か。それもなにか自分が女になっていることと関係があるのかもしれないな。

この世界での精霊の在り方や人々がどう認識しているかや、精霊と契約している人たちなどについて調べていけば何かわかるかもしれない。そうヒカルは心に留めておくことにした。

『よし、サラもちゃんといることだし、そろそろ近くの町か村にでも行こうか。道案内頼むよ?』

『うむ。任せておけ。…まあ、案内といってもこの広場から麓の村まで突っ切るだけじゃがの』

「よおーし！」

気合いを入れるために自分の頬を両手で軽くたたき、ヒカルは勢いよく駆け出した。

そして、駆け出してわずか数メートルで胸を両手で押さえ、へなへなと座り込んでしまった。

『ん？どうしたのじゃヒカル。具合でも悪いのか？』

『い、いやそうじゃないよ。…ただ、ちょっと忘れてた』

身体が女性のものになっていたことをすっかり失念していた。

胸は男だったときと違い、大きく前にせり出し、シャツを窮屈そうに押し上げている。この状態で走るとどうなるか。…つまりは擦れてしまうのだ。どこがとか、聞くな。

おまけに擦れた時に伝わってくる、くすぐったさというか何というか変な刺激のせいで妙な気分になってしまう。これでは近くの村に行くのはおろか、森を抜けることさえままならない。

ヒカルは登山用に使ってきた救急セットから包帯と包帯止めを取り出すと、上着として羽織っていたウインドブレーカーを脱ぎ、長袖のシャツとアンダーウェアをたくしあげ、包帯をサラシ代わりに巻き、ずれたり外れたりしないように包帯止めでしっかりと固定した。

多少きつく巻いたので、胸に圧迫感があるが、これならよほどの

ことがない限り外れないだろう。

『…それにしても』

なかなか大きい。ヒカルとて元は17歳の男子。このようなものに興味がない訳はなく、包帯をサラシ代わりに巻いていく過程ではその大きさ、形、色艶に、自分のものであるにもかかわらず、ドギマギしてしまった。

これで自分についてなかったらもつとよかったのになあ…と、ついつい益体もないことを考えてしまうヒカルであった。

『…ヒカルよ。そなた、今何か破廉恥なことを考えていなかったか？』

『え！？そ、そんなことないと思うよ？』

『…はあ、やれやれ』

精神でつながっているということは、こういう考えもサラには伝わってしまうのかもしれない。そんなことでサラに呆れられたくはないし、自分以外に知られるというのにもちよつと抵抗がある。

精霊との精神の同居は禁欲の修行になるかなあと思うと同時に、プライバシーってなんだろうと考えてしまうヒカルであった。

「ん…こんなもんかな」

軽く飛び跳ねたり、上半身をねじったりしてサラシの具合を確認する。幸いにもずれる心配も擦れる心配もなさそうだ。

しかし、女性はよくこんなものをぶら下げて運動ができるものだ。学校の体育の授業レベルだったらまだしも、運動部の生徒やそれこそプロとして活躍しているアスリートはどうやっているのだろうか。自分と同じようにサラシやサポーターで固めているのだろうか。だとしたらちよつと親近感が…。自分と同じような光景を想像し、人知れず頬を染めるヒカル。

『何を考えておるか。ヒカル』

呆れ声で突っ込みを入れるサラ。姿を見せていたら、盛大にため息をつかれていたかもしれない。

『あはは、ごめん。それじゃ、そろそろ行こっか』

『うむ』

どれくらいの距離を歩いたのだろうか。額に浮かぶ汗をシャツの袖で拭きながらそう考える。

かなりの距離を歩いた気がするのだが、いかんせん同じような景色がずっと続いているし、地面より盛り上がった木の根や石などに躓いてこけないよう慎重に歩いているので、まったく進んでいないような気もする。

森を抜けるために移動し始めた最初のほうこそピクニック気分で

楽しく歩けていたのだが、変わり映えのしない景色は思った以上にストレスになるし、何より歩いている方角があっているのかも不安になってくる。

『ヒカル。そろそろ休憩したらどうじゃ？』

歩き始めて幾度目かの休憩。近くにあった木の根に腰を下ろし、リュックサックから携帯用の食料を取り出して口に放り込む。口いっぱいに広がるほどよい酸味と甘みが疲れた身体に沁み渡り、また歩き出す活力を与えてくれる。ビバ、携帯食料。

飲み込んだあと、水筒のお茶で軽く喉を潤すと、ヒカルはサラにあとどの程度歩けば森を抜けれるのか訪ねた。

『ふむ、そうじゃのう。今が七分目くらいじゃから、このままいけばあと半刻といったところであろう』

おお、七分目。知らずのうちに結構歩いていたようだ。うれしい誤算に頬を緩め、リュックサックをからいいざ歩き出そうとしたとき。

バキリ。

と、後ろでまるで倒木を踏み碎いたかのような音がした。

見ない方がいいと分かっていたつも、振り返ってしまう。

掌に、背中に、先ほどまでとはまた違う汗をかきながらゆっくりと振り返ると、そこには。

『すまぬ、ヒカル。すっかり失念しておった』

ヒカルの身の丈を優に超える熊のような生き物が、牙をむき、重低音の唸り声を響かせながら、しっかりとヒカルを睨みつけていた。

第5話：森の中、暗転

なんだこいつは。

外見は熊に近いと思うのだが、その体長は3mを優に超えている。後足で器用に立っており、その丸太のように太く長い前足には、明らかに他の生物の命を刈り取るために備わっている巨大な鉤爪があった。

外見は熊に近い。そう称したが、これはもはや熊ではない。熊よりももっと獰猛で、強靱で、貪欲な生物、いや、化物と言った方が適切かもしれない。

『グリズルじゃ。我としたことが…道理で先ほどから他の生き物の気配がせぬわけじゃ』

『ど、どういこと？』

『おそらくこの一帯の生物は、こやつに食い殺されたか、恐れをなして逃げ出したか、そのどちらかじゃ。…それに今は、こやつらにとつての繁殖期。同種の異性以外の縄張りへの侵入を、グリズルは絶対に許しはせぬ』

途端、咆哮。

その巨軀から想像するに難くない地鳴のようなそれは、容赦なくヒカルに襲い掛かり、全身の筋肉を緊張させ、骨を軋ませ、脳髓を揺らし恐怖で塗りつぶす。奥歯がガチガチと音をたて、身体が小刻みに震え、毛穴という毛穴が開き脂汗が全身を滲ませる。

生まれて初めての死の恐怖に、ヒカルの思考はパニックに陥っていた。

『ヒカル！我の声を聞け！怯んでおる場合ではない、殺されるぞ！今すぐここから逃げるのじゃ！早く！』

「…っ！」

サラの存在と叱咤がヒカルの意識をつなぎとめる。

恐怖に打ち震え、竦み、棒立ちになりそうな身体に鞭打って反転し、勢いよく駆け出す。

グリズルは、そんなヒカルをせせら笑うかのように唸り、その巨体に似つかわしい強大なパワーで跳躍すると、信じられないほど軽やかな身のこなしでヒカルの前に着地した。

振るわれる巨腕と剛爪。

咄嗟に後ろに跳躍し、取り出した登山用のストックで防御を試みる。グリズルの一撃にストックは薙ぎ払われ、間一髪直撃はしなかったものの、ストックを握っていた左腕にはすさまじい衝撃が加わった。

あと一瞬ストックを手放すのが遅れていたら、肩ごと持っていかれていたかもしれない。

そんな想像にぞくりと背を震わせながらも、左腕の痛みに冷静さを取り戻し、着地するとすぐに方向を転換し、一気に駆け出した。

「サラ！具現化とかなんとかで、あの熊みたいなの何とかできないか！？」

『無理じゃ！まだ我がヒカルの魔力に馴染んでおらぬ！このままでの具現化はそなたへの負担が計り知れぬ！』

精霊と契約する者にとって大事なことは、精霊が見えることは勿

論のこと、『慣らし』と呼ばれる己の魔力を契約した精霊に馴染ませる作業であると言われている。この『慣らし』が上手くいっていないと、せっかく精霊を具現化してもヘナチヨコな力しか行使できなかつたり、精霊が契約者の魔力を摂受する際に加減が分からず、根こそぎ持つて行つてしまい、最悪、死に至る場合もあるのだ。

サラにとつても、ヒカルの優先順位は高くなりつつあるので、できればそのような危険な賭けは避けたかった。

「ぐ…それじゃあ、仕方がないか。頑張つて逃げてみるよ！でも！本当に危なくなつた時は頼む！！」

『…気は進まぬが』

グリズルにとつてヒカルはただの捕食対象に他ならない。そんな捕食対象が、攻撃をかわしたばかりか、またしても逃走をくわだてていることにグリズルは酷く怒り、もともと縄張りを荒されて腹に据えかねていたこともあり、その怒りは頂点に達した。

そうして発せられた咆哮は、さきほどよりもさらに大きく、グリズルの怒りが半端なものではないことを周囲に示すかのようだった。

咆哮を聞いたヒカルは、竦みそうになる身体を叱咤し、はいているズボンのポケットから十徳ナイフを取り出すと、折りたたまれていたナイフを展開し、右手で構え、駆けながらグリズルの様子をうかがった。

グリズルは咆哮を終えると、背中を見せ逃げているヒカルに狙いを定め、一足飛びで肉薄し、一撃で仕留めようと再びその巨腕と剛爪を振りあげる。

それを見たヒカルは、ナイフでリュックサックの肩掛け部分を切り落とし、顔の前で腕を交差させると、勢いよく前転した。その直後に振るわれたグリズルの剛爪によって、リュックサックは寸断さ

れ、中に詰めていた荷物も残らずバラバラに引裂かせて四散した。
もちろん、ヒカルにそんなことを確認している余裕はなく、前転した勢いを利用して素早く立ち上がると、一刻も早くこの場を離れるべく、駆け出そうとした。

そして、そこに響く^{みたび}三度の咆哮。

二度目のときはある程度予想できていたためなんとかだったが、今回は完全に虚を突かれる形となり、一瞬とはいえ硬直した身体はむき出しになっていた木の根に躓き、あっけなく転倒してしまった。

「ぐ…あつ…」

吐く息は荒く、流れる血液は熱く滾り、足の筋肉は痙攣を始めている。男だった時よりも軒並み低下している今の筋力や体力では逃げきるのは到底無理だったのかもしれない。だからといって、男だったら逃げ切れたとも思えないけれど。

余裕があるはずがないのにそんなことを考えているヒカルのもとへ、まるで舌舐めずりをするかのような唸り声を上げ、のしのしと近づいてくるグリズル。

「く…サ、サラ…。頼む…」

息も絶え絶え、サラに具現化を示唆する。まだ…こんなところで死にたくない！

多少危険でも、たとえ僅かでも、そこに生き残るための希望があるのなら！

『ぐ、仕方がない！』

やってみる価値は、大いにある！

『意識をしっかりと持って、多少つらくても辛抱せえよ！ヒカル！』

瞬間、全身の筋肉が弛緩し、背骨がずりりと引き抜かれるような感覚。己の魔力が精霊に摂受されているのを理解する。

ヒカルとグリズルの間の空間が歪み、周りの空気が、森が、世界が緊張する。それを、グリズルは己の視覚と研ぎ澄まされた野生の感覚で感じ取り、歩みを止め、訝しんだ。

歪みが徐々に収束し始めると、歪みの中心から光が漏れ出した。歪みが収束すると漏れ出す光は多くなり、漏れ出す光が大きくなる。歪みが収束し、そして、一際大きく煌めいたかと思うと、歪みは収束を終え、そこにはサラがヒカルを庇うように現れた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

咆哮。サラはその小さな体軀からは想像もつかないような雄たけびを上げる。

それは、グリズルの地鳴のような咆哮がまるで兎戯であったかのような凄まじいもので、世界を鳴動させた。

「悪いのはそなたの縄張りに知らずとはいえ踏み込んだ我ら。しかし、だからといってヒカルを死なせるわけにはゆかぬ。これ以降、ここには二度と来ないゆえ、今回は全力で見逃してもらおうぞ！」

サラは大きく息を吸うと、直径がヒカルの身長ほどもある巨大な火球を吐き出した。

火球はグリズルの手前の地面に着弾すると、大地や周りの木々を爆散させ、その衝撃でグリズルを後方へ大きく吹き飛ばした。

吹き飛ばされたグリズルは地面を二転三転し、転がった先にあっ

た岩に激突して気絶してしまった。

「ヒカル！大事ないか！？」

サラはそんなグリズルに目もくれずにヒカルに振り返ると、その無事を確認した。

「あ、ああ、うん。多少身体がだるいだけで、全然心配ないよ。…それにしても、すごい雄たけびと火の玉だったなあ。精霊つてのはあんなにすごいものなの？」

「あの程度は序の口じゃ。…それよりもあのグリズルが目を覚まさぬうちに早く森を出た方がよいじやろう」

「ああ、そうだね。追いかけてこは二度とごめんだし、さつさと抜けてしまおう」

危機は去った。あとは森を抜けて近くの村で休もう。

と、安堵したのも束の間、ヒカルの横合いの木々がなぎ倒され、先ほどとは別のグリズルが乱入してきた。

「ぬかった…！番であつたか！^{つがい}」

番のグリズルは、縄張りを荒されたことはもとより、伴侶を虚仮されたことに怒り狂い、そのバスケットボールほどもある自身の握り拳を何の躊躇いもなく、ヒカルに打ち下ろした。

ヒカルと番のグリズルとの距離は1mも無く、サラが防御に走るが間に合わない。咄嗟に左手を上げて直撃を防ごうとするが、訪れた衝撃はその程度の防御などまったく意に介さず全身を突きぬけ、

左腕の肉を潰し、骨を砕き、守ったはずの肋骨を押し折り、内臓に損傷を負わせ、肺の空気を絞り取った。それだけに止まらず、ヒカルは数メートルも吹き飛ばされ、その先にあつた樹木に背中から強かに打ちつけると、地面に崩れ落ちてぴくりとも動けなくなった。

「ヒカル！大丈夫か！？ヒカル！！」

全身を襲う激痛でヒカルの瞳孔は開ききり、呼吸をすることもままならず、その耳はサラの声すら拾えない。

痛みを少しでも緩和させようと、脳内麻薬が大量に分泌されるが、焼け石に水でまるで効果が上がらない。

そして、激痛に対する最後の防衛手段の使用が身体から提唱され、脳が承認し、

「ヒカル！我の声を聞いておくれ！頼む！答えておくれ！」

ヒカルの意識は、あっさりと暗闇に落ちた。

第6話：出会い

女が森の中を歩いてた。腰まで伸ばした見事なブロンドを首の付け根の辺りで一つまとめているその女は、森の中で探し物をしていた。

「…ここも違うようね。かすかに名残りがあるけれど、そこまで強くはないわね…」

異変は、朝日課にしている剣術と魔法の鍛練を行っているときに訪れた。森全体を覆うように発生した強力な魔力の流れを感じたのだ。時間的にはそれほど長く感じていたのではないのだが、それがかえって怪しさと不自然さを醸し出し、結局午前の鍛練もそこそこに、装備を整え、こうやって調査に赴いたのだ。

「うーむ。名残りがそこかしこに散乱しちゃってて、中心地がイマイチよく分からないわね。…っと、ここからさきは番のグリズルの縄張りか。迂回を…ん？これは…人の足跡？」

金髪の女は、グリズルの縄張りをを迂回しようと、踵を返した先で真新しい人の足跡のようなものを見つけた。

自分と同じように朝の魔力異常を調査しに来たのか魔法使いか、あるいは魔力異常を引き起こした者なのか。…何れにせよ何か話が聞けるかも知れない。思わぬ発見にほくほく顔の金髪の女は、足跡の主のもとへ尋承してもらおうと、足跡の行き先を確認すると、その美しい顔を台無しにするようにあんぐりと大口を開けた。

「ちょ、ちょっと何よこいつ！グリズルの縄張りに一直線じゃない！馬鹿なわけ！？自殺志願者なわけ！？あー、もう！！」

金髪の女はそう悪態を吐くと、猛然と駆け出した。見た目は所謂クールビューティーといったところなのだが、その性分は案外世話焼きなのかもしれない。

続く足跡は、グリズルの縄張りの中心へずんずん進んでいる。もう、馬鹿であることは決定である。そのことに軽く舌打ちしながら、踏み込む足に力を込め、先を急ぐが、一向に追いつく気配がない。追いつけないことへの焦りと、グリズルの縄張りの中心へ考えなしに進んでいる戯け者の馬鹿さ加減に理不尽な怒りが金髪の女に湧いてくる。

「こいつ…まさか、本当に自殺志願なわけ!？」

だとしたら、助けた後にしこたま殴って半日は説教してやる！
戯け者を縄で雁字搦めにして天井から吊るし、長々と説教を垂れている場面を想像し、口角を吊り上げる金髪の女の耳に、障りのある咆哮が響然する。

まだ距離がある。立ち止まり、咆哮の大きさと残響からグリズルの位置と方角を目測する。…急がねば、今朝の魔力異常を引き起こした人物なら、あるいは大丈夫かもしれないが、普通の人間だったらほぼ間違いなく殺されてしまう。

「くっ…。間に合えっ!」

最悪の想像を振り払い、もはや足跡は無視して、最短距離でグリ

ズルに接近し、制圧すべく、より一層力を込めて駈け出す。

「ま・に・あ・えゝ!!」

彼女の健脚の助けもあり、グリズルの咆哮や地面を蹴る音が徐々に大きくなり、ついにはグリズルとグリズルの咆哮を三度凌いだ猛者を視界にとらえた。

「犬…と、女の子!？」

思わずそう言ってしまった。世にも珍しい黒い髪を持った少女と紅毛の犬。あの凶暴なグリズルの咆哮を三度も掻い潜った猛者が、こんな年端もいっていないであろう少女とペットの小さい紅毛の犬であろうとは。しかし、その認識は直後に覆されることになる。

「!!!!!!!!!!!!!!」

炸裂する咆哮。そして、吐き出される巨大な火球。グリズルを容易く吹き飛ばし、気絶させたそれを見て、紅毛の犬はペットではなく、黒髪の少女が契約している精霊であると認識を改める。

そうしてそのギャップに呆けていたのと、黒髪の少女が無事グリズルを退けたことに安堵していたため、番のグリズルが木々を薙ぎ倒し、その少女に肉薄するのに全く反応ができなかった。

殴り飛ばされる黒髪の少女。咄嗟に左腕で防御を図ったとはいえ、グリズルほどの剛腕では無事では済むはずもなく、大きく後方へ飛ばされ、樹木に叩きつけられ、崩れ落ち、ぐったりと動かなくなる。

「…っ！わたしとしたことが、呆けて番の接近を許すなんて！」

数瞬とはいえ、呆け、周りの警戒を怠り、その結果黒髪の少女に

重症を負わせてしまった。そのことに對する自責の念と、己の迂闊さに齒噛みすると、金髪の女は腰にさしている剣を勢いよく引き抜いた。ブロードソードのような幅広な刀身には、刃に被さらないようにびっしりと何かの文字や記号が刻まれており、それが普通の剣の類ではないことを暗に明示する。

「ふっ！！」

剣に魔力を注ぎ込む。文字や記号がそれに呼応するように淡く光りだすと、刀身の周りに暴風が吹き荒れる。金髪の女は剣を頭上高くに振りかぶると、今しがた黒髪の少女に止めを刺そうと歩み寄るグリズルへ向けて、勢いよく振り下ろした。

「いけええええ！！！」

剣から解き放たれた暴風は、射線上の障害物を薙ぎ倒し、グリズルを襲う。見当もつかない第三者からの攻撃にグリズルは大いに驚き、これまた大きく吹き飛ばされると、先のグリズルと同じように岩や樹木に激突し、気絶してしまった。

金髪の女はそれを見て、グリズルが起きだしてこないことを確認すると、取り敢えず魔法で応急処置をし、近くの村の診療所へ連れて行くこと、いまだぐったりしている黒髪の少女のもとへ駆け寄った。

まどろみとともにゆっくりと意識が覚醒して行く。さらさらと心

地の良いシーツの感触を肌で感じると同時に強まってくる左腕と脇腹の痛みとおなかの圧迫感。…おなかの圧迫感？

「…サラ？」

なるべく痛まないように、首だけを動かして確認すると、ヒカルのおなかの上にはサラが丸まって寝息を立てていた。

精霊も眠ったりするんだな。そんな場違いのことを考えながら、ヒカルはあたりを見渡した。

「たしか、あの熊に殴られて、そこで…えーっと、どうなったんだ？…それに、ここはどこだろう？」

最後に目を閉じたときは森の中だったはずだ。だが今は清潔なシーツにくるまれてベッドの上で寝ころんでいるし、木の机や椅子、漆喰の塗られた壁、縦方向に格子の入っている木の窓など、あきらかな人工物に囲まれている。微かに消毒液のような匂いもするし、何処かの病院かなにかかもしれない。

「夢…じゃないよな。怪我もしてるし、サラもいるし、第一こんな場所は知らない」

それでもあまり驚かないのは、知らない場所に飛ばされる経験が以外に豊富だからだろうか。とりあえずサラを太ももの上にずらして起き上がってみる。それだけでも左腕と脇腹には刺すような痛みが走り、思わず顔をしかめる。そして自分の体を見回すと、左腕は動かないように板が何かをあてられ、包帯でぐるぐる巻きにされていて、服もグリズルと会った時のような長袖シャツに動きやすいナイロン製のズボンといった出立ちではなく病人が着るような白いゆつたりとした浴衣のようなものに着替えさせられており、おまけにサ

ラシも外されていた。

「あら？気がついたようね。気分はどう？」

そこに現れる謎の女性。見事なブロンドを腰のあたりまで伸ばしたその女性は、ほほ笑みながらやさしい声で語りかけてきた。

「え、あ、ええと。多分大丈夫です。はい、多分。あの、あなたが助けてくれたんですか？」

急に現われた事と、その美しさもあって、前半は赤面し、しどろもどろになりながら答えるヒカル。

「ええ。とはいっても、もうちょっとわたしがしつかししていれば、あなたは怪我をしなくてすんだのだけれど、ね」

眉根を寄せ、唇を噛み、悔しそうな表情を見せる金髪の女性。綺麗な顔の女性にそんな表情をされると変な迫力があるし、罪悪感も大爆発である。何があったかは知らないが、自分が怪我をしたのはこの女性のせいではないため、あわてて右手を振り、女性の言葉を否定する。

「いえ、そんなことないですよ。おかげで死なずに済んだんですから、この程度の怪我は気に病む必要はありませんよ！」

「ふふっ。そういつてもらえるところらも随分気持が楽になるわ。ありがとね」

「いえ、礼を言わなければならぬのはこちらですよ。助けていただいてありがとうございました。それで、ええと…あなたは…」

「ん？ああ、そういえば自己紹介がまだだったわね」

言いよどむヒカルに両手をポンと打ち合わせ、そう告げる金髪の女性。

「わたしの名前はテレジアよ。一応職業は魔法使いといったところね。よろしくね、ヒカル」

「よろしくお願いします、テレジアさん。…って、あれ？なんでボクの名前を？」

「その子」

テレジアが指をさした先にいるのは、いまだにすうすうと心地よさそうな寝息と立てて身体を丸めて眠っているサラ。

「サラからいろいろ聞いたわ。あなたも大変だったようね。あ、そうだ。お腹すいてない？リクエストがあればなにか作ってくるわよ？」

そう言われると、お腹がすいているような気がする。そう思ってお腹をさすると、待ってましたと言わんばかりに盛大な声を上げる腹の虫。ヒカルは赤面し、苦笑するとテレジアに何か頼むことにした。

「すみません。それじゃあ、なにかお願いしてもいいですか？」

「ふふっ、いいわよ。たくさん食べて、怪我を早く治さなくっちゃね」

テレジアは、ご飯を作るためにヒカルのいる部屋を出ようとして、
なにか思い出したように振り向くと、右手の人差し指を立てた。

「ああ、それと」

「なんですか？」

「わたしに対して以後、敬語は禁止ね。背中がむず痒くなっちゃうから」

「え、でも…」

「命の恩人からのお願いよ？だめかしら？」

そういつて悪戯っぽい笑みを浮かべるテレジアに、ヒカルはその
申し出を了承するしかなかった。

「…分かったよ、テレジア。こんな感じでいいかな？」

苦笑しながらそういうヒカルに、テレジアは満足そうな笑みを浮かべた。

「そんな感じでいいわよ。ああ、それと」

またしても人差し指を立てるテレジア。今度はなんだろう、と、
思わずすこし身構えてしまったヒカルであった。

「その子」

指さした先にはまたしてもサラ。

「起きたらお礼いつときなさいよ？わたしに自分たちのことを話してくれてる時も、あなたことずーっと心配してたんだから」

ヒカルは思わずサラを見る。出会ってまだ間もないが、サラには随分頼っていて、おまけに心配までかけていたらしい。

丸まっているサラの背中を一撫ですると、テレジアに向き合った。

「うん、分ったよ。教えてくれてありがとう」

そう言って、微笑みかけるヒカル。テレジアはその微笑みに目を丸くし、次いで頬を軽く染め、照れたように笑った。

「サラの言ってた通りね」

「え？」

「ヒカルの笑顔はお日様みたいだわ。…あなたによく似合ってる」

サラのときと同じようなことを言われ、またしても照れ隠しに頬をかくことしかできないヒカルであった。

第7話：変化

「それじゃあ、わたしは何か作ってくるから、またあとでいろいろ聞かせてもらうわね」

「うん。分かったよ」

部屋を後にするテレジアを見送ると、ヒカルはサラに目を向けた。すやすやと寝息を立てて太ももの上で気持ちよさそうに眠りこけている、ちまっごく可愛い紅毛の犬。この姿を見ていると、とても自分を助けるためにあれほどの力を出した精霊とは思えなかった。

「サラ…」

見る者すべてに幸福感をあたえそうな、慈愛に満ちたほほ笑みを浮かべ、サラの丸まった背をやさしく撫ぜる。艶々とした体毛の感触が心地よい。それがこそばゆかったのか、サラはその小さな口を目一杯広げ欠伸をすると、身体全体で伸びをし、ムクリと起き上った。

「あ、おはようサラ。起しちゃったかな？」

ちなみに今は朝である。木の窓から降り注ぐ柔らかな陽光は、ヒカル達をやさしく包み込んでいる。

「うむ、おはよう…！？ヒ、ヒカル！？目が覚めたのか！？ヒカル――！」

起きた直後の寝ぼけ眼は瞬く間に退散し、その小さな双眸をいつ

ぱいに開いてヒカルを視認する。次いでイノシシよろしくヒカルの胸元に突進し、すがりついて声を出して泣き始めた。

「うえええ、ヒカル、ヒカルう。我は、我はあ。ヒカルう」

「うぐっ…う、うん。ボクは大丈夫だよ、サラ」

小さな身体に似合わず存外に重い突進を受けて、左腕と脇腹の痛みが引きつりそうになるのを根性で我慢し、サラに無事である旨を伝える。あと少し、左にずれていたら感動の場面をぶち壊しにしてのたうち回っていたかもしれないと、内心冷汗をかきながら、涙声で何を言っているかよく分からないサラの背を、それこそ泣きじゃくる幼子をあやすかのように撫でつける。

サラも案外泣き虫なのかもしれないな、と頭の片隅で思いながら苦笑し、そこでふと、手に伝わるサラの色艶のよい体毛の感触にある疑問が浮上した。

「あれ…サラ、なんで具現化できてるんだ？」

起きてすぐは少し寝ぼけていたのと、いきなり場所が変わっていたこと、テレジアと話していたこともあって、気にしていなかったが、今考えるとすごくぶる疑問に思う。サラの説明のニュアンスから、精霊の具現化は某ゲームのような召喚獣をヒカルは想像しており、そのことから考えたら、あの森から具現化し続けていると思われるサラの存在はちょっとおかしいのではないか。

「ぐす…ぐす…うん？ああ、そのことが。うむ…ずびい、ぐすん、よし」

ひとしきり泣いて落ち着いたのか、ひときわ強く鼻面を押し付け

ると、人の胸で盛大に鼻をかみ、涙はともかく鼻水で服をべちよべちよにするサラ。何がよしだ借りものなんだぞ。

「うむ、我がこのように具現化し続けていることは我も不思議に思っておった。人間の魔力ではよくても四半刻（30分）ほどでカラになると思っておったのじゃが…。ヒカルの魔力は特筆にあたいするやもしれぬな。寝ておる時も我への供給が途切れなかったぞ？」

「それを言ったら今までの状況全部特筆にあたishそうなんだけだなあ。…それにしてもボクの魔力、か」

顎に右手を添え、考え込むヒカル。おそらく甚大な量の魔力を持つていることと、意識を失ったいる間でも供給されていた魔力。理由を考えてはみるが、最近まで日本の学生という、魔力の「ま」の字もかすらない生活を送っていたのだから、分かるはずもない。まあ、強いて理由をつけるというのなら――

「これも何か関係があるのかも…いや、かもじゃないな。関係がある」

こちらに来たことか、自分が女になったことか、あるいはその両方か。しかし、いずれにせよ、

「ボクだけで考えるのには知識がなさすぎるな。…分かったことだけど。…まあ、最初に具現化したときみたいな全身の脱力感はないし、魔力が多すぎて困るってことも今はなさそうだし、諸手を挙げて歓迎する必要もないにせよ、悲観する必要もなさそうだね」

「ふむ。ヒカルが良いなら、我が気にしても仕方がないの。それに我としてヒカルの魔力は心地が良いから、喜悅こそすれ邪険にする

いわれはないからの」

「ははっ…そいつはどうも。あ、そうだ。寝てる間も魔力を供給してたって言ってたけど、一体どのくらいボクは気を失ってたんだ？」

気絶したのが夕方くらいだったとして、今が朝だから、半日とちよつとくらいか。しかし、実際は予想の斜め上だった。

「二日と半日ほどじゃ。心配したぞ」

「ふ、二日あ！？ボ、ボクそんなに寝てたわけ？」

「うむ。その間我に対して魔力は垂れ流し状態じゃったぞ？」

おまけにいくら摂受してもぐっすりじゃったぞ。と、先ほど泣いていたのが嘘のようにけらけらと笑うサラ。精霊に根こそぎ魔力を持っていかれて死に至る場合がある話を聞いているから、このやろう、怪我人になんてことしやがる、と、思わず喉から出かけるがこはぐつと我慢。今、ここでこうして無事にいるのもサラのおかげあってこそだ。サラがやったのはかわいいいたずらみたいなものだから、ここは大人の寛容さで受け入れよう！そうとも！あらあらうふふ、と大人の寛容さで許そうではないか！

「一度は森で行った時の10倍近くを一気に摂受してみたのじゃが、それでも阿呆のようにすやすやと眠りこけておったぞ？」

「怪我人になんてことをしてくれてんだよ！！」

寛容という言葉を、躊躇なく己の辞書から削除したヒカルであった。

「…テメルの森で魔力異常が発生した、だと？」

「はい」

男と老爺が、豪華な造りの書斎で話している。

「それはいつ頃発生したのだ？」

「二日ほど前に、私が精霊殿で瞑想を行っているとき感知致しましたので、おそらくその頃かと」

片膝をついた男が、巖のようなごつごつした顔に立派な髭を蓄えた老爺に報告をしていた。

「…何故報告せずに黙っていたのだ」

「感知していたのがほんの数秒でしたので、私の勘違いかと思ったのです」

老爺は疑問を持つように眉根を寄せると男に問いかけた。

「では、何故今更になって報告を？」

「勘違いとは思えなくなったのです」

「それは何故？」

「…精霊術師としての長年の勘、です」

「勘？」

「はい。私の勘が、あれは勘違いでない、と今朝になって騒がしくなりましたね。それで報告をしに」

「ふむ」

老爺は立派な髭に手を添えると、しばらく考え込むように目を伏せると、おもむろに口を開いた。

「…お前の勘はなかなか侮れぬからな。よかるう。私から調査隊を派遣するよう進言しておこう」

「ありがとうございます。…それと、これも勘でしかないのですが…」

「かまわん。話せ」

「予感がします」

「予感？」

「はい。その魔力異常を引き起こした者が、我が国に、ひいては世界に影響を及ぼすかもしれません」

「…分かった。心に留めておこう。私は草案をまとめるからさがる

とよい」

「はい」

男が書斎から出るのを確認すると、老爺は溜息をついた。…それにしても、魔力異常を引き起こした「者」、か。無意識のうちに人間が引き起こしたと思っっているのだろうか。そう考えながら、調査隊派遣の草案をまとめようと、筆をとったところでふと思い出した。先日、わずかに解読が進んだ石碑に刻まれていた一節を。

「…豊穰の…女神…。いや、まさかな」

そう呟きつつも、草案を早めにまとめあげると、老爺は石碑の解読に向かうべく書斎を後にした。

第8話：異界人

「はい、おまちどうさま」

「おお、おいしそうだね！」

テレジアが作って持ってきてくれた料理はサンドイッチのようなものと、コーンポタージュのようなものだった。おそらく小麦粉か、もしくはそれに順ずるもので作られていると思われる、薄めにスライスされているパンのようなものに、茹でた卵かなにかを細かく切ったものをマヨネーズと思しき物体であえてあるものと、レタスっぱい葉っぱのような野菜を挟んである。

コーンポタージュらしきもののほうは、ヒカルの感覚では極一般のコーンポタージュのように見えるが、サンドイッチと思われるものを見た後では、正直何を使ってあるのか見当もつかない。

料理を持ってきてもらったときは能天気賞賛の言葉を送っていたヒカルであったが、こう、知らない物尽くしでは口に入れるのに多少しり込みしてしまう。

「あ、サラも起きたのね。おはよう」

「うむ。おはよう、テレジア。引き続きヒカルが世話になるの」

「ふふ、はいはい。…そういえば、サラは何か食べるの？喋る精霊はおるか、こうまではつきり具現化してる精霊は初めて見たから、よく分からないのだけど」

「うむ、それならば心配には及ばぬぞ。我は精霊故食物を摂る必要はないし、補給すべき魔力もヒカルから十分に貰っておる」

「そう？それならいいわ」

さらりと何か聞き過ごすべきではないことをいいながら談笑する二人。ヒカルはそれを尻目に目の前の料理を凝視し、やや失礼な感想をいくつか頭に浮かべていた。

「悪いわね、ヒカル」

「え、え！？な、何が！？」

心の中を見透かされたのかと、少しばかり声を上ずらせ、どもってしまふヒカル。

「先生は料理の習慣がなくてね。薬草や丸薬なんかはたくさんあるんだけど、料理に使えるような材料はあんまりなくて簡単なものしか作れなかったわ」

「あ、ああ、そんなことは気にしないでいいよ。十分、その…おいしそうだし」

失礼な感想に関することではないことに安堵すると、先生という言葉が気になった。

「テレジア、先生ってのは？」

「え？ああ、そういえばまだ言ってなかったわね。ここは診療所よ。あなたが意識を失った、テメルって森に近いカイナって村のね。で、先生ってのはここのお医者さんね。今は、日課の散歩と村人の診療に行ってるわ」

あなたの世話をわたしに押し付けてね、とくすくす笑うテレジアに、ヒカルは苦笑し、ありがとう、と感謝の言葉を述べた。

「ここまで運んだのはわたしだけど、ベッドを貸して治療をしてくれたのは先生だから、帰ってきたらお礼くらいいいなさいよ？」

「うん、そうだね。そうするよ」

テメルの森にカイナという村。知らない言葉が増えたがとりあえず後回しにして、今は診療所の先生にお礼を言うことを、ヒカルは心に留めておくことにした。

「よしよし。…ああ、それで、料理食べてみてくれる？得意なほうだけど、材料は少なかつたし、新しいことにも挑戦してみたの。よければ感想くれる？」

「え？あ、ああ、うん」

そうだった。目の前の料理を食べなければならなかった。未知の材料軍にしり込みしているヒカルだが、この料理はテレジアが厚意で作ってくれたものなのだ。感謝を示すためには残さず食べきらなければなるまい。ヒカルはお皿に乗っている一切れを掴むと、半分ほどを噛み切って口に含んで、よく咀嚼した。

「ん…あれ、おいしい…」

途端に広がるクリーミーな味。そしてそれを引き立てるような、レタスっぽい野菜のシャキシャキとした歯触りと、全体をやさしく包み込むふわふわとした感触。これは、材料は違えどもまごうこと

なきタマゴサンドである。

ヒカルは、知らない材料というだけでしり込みしていた先ほどまでの自分が急に恥ずかしくなり、頬をかきながらごまかすと、テレジアの料理を賞賛した。

「うん、おいしいよこれ。すごくおいしい」

「そう？それは良かったわ」

うれしそうに微笑むテレジア。それに少しばかり頬を染めながら、ヒカルはこの料理がいったいどういったものなのか聞いてみることにした。

「質問なんだけど、これってどんな料理？」

「よくぞ聞いてくれたわ！」

その豊満な胸を自慢げにむんと反らし、歓喜するテレジア。

「オリジナルよ！」

「オリジナル？」

「そ！さっき台所で考え付いたの。ヒカルが左腕を怪我で使えないからどうにかできないかなってね」

これなら片手があれば食べれるでしょ？と、再び自慢げにテレジアは胸を反らした。それにしてもオリジナルとは驚きである。どうやらヒカルは、サンドイッチ誕生という料理界の歴史的瞬間に立会人になったばかりか、ある意味切っ掛けとなったようだ。

しかし、むこうではサンドイッチさんが考案したからサンドイッチという名前になったのだから、こっちではテレジアという料理名になるのだろうか？」と、頭の片隅で考えながら、次にコーンポタージュのようなスープをスプーンで掬って口に運んだ。

「うん。これもおいしい。これはどんな料理？」

「トトカっていう家畜のミルクと野菜を煮込んですこし味付けしたスープよ。薄味だから飲みやすいし、栄養が豊富で怪我人や病人にはもってこいの食べ物よ」

トトカという家畜は知らないが、おそらく山羊や牛のような生き物だろうとヒカルは見当をつけた。

しかしながら、サラといいテレジアといい、まだ見ぬ診療所の先生といい、会う人会う人に世話や心配をかけているな、と考え苦笑しながらも、その出会いに、その巡り合せに、大げさな言い方をすれば運命に深く感謝し、残りのサンドイッチとスープを平らげるヒカルであった。

「別の世界からこの世界に、ねえ……」

食事を終えると、ヒカルは自分のことについて、この世界に来たこと、女の体になったこと、サラと出会ったこと、落ちた場所がテルの森の広場のような場所であったこと、など包み隠さず話すことにした。

最初はテレジアがサラ聞いたと言っていた通りに全部知っている

と思っていたが、サラが話したのはどうやら自分達の名前と、テメルの森で出会ってカイナを目指していたところでグリズルに遭遇してしまったということだけだった。

「それにしても驚きの連続ね。自伝が空想小説になりそうだわ。…ヒカルみたいなのは、ええと…異界人、異世界人、渡来人、ってやつなのかしら？つながつて物が落ちてくるのは知ってたけど、人に会うのは初めてだわ。…異界人っていうのは、誰も彼も髪も目も黒いものなの？」

「そういうわけじゃないけど、ボクの周りには黒髪が多かったよ。…異界人はっていうことは、こっちでは黒髪は…？」

「ええ、いないわね。少なくともわたしは見たことも聞いたこともないわ」

「そっか。ちょっと残念だな…」

髪が黒いことで好奇の目にさらされる光景を想像し、思わずため息をついてしまった。

「ふむ。見ぬ色だとはいえ、我は黒い髪はヒカルに似合っていると
思うがの」

「あ、それはわたしも思うわ。黒って、暗くて近寄りがたく、畏れ多いイメージがあったけど、あなたの黒髪は違うわね。高貴で清廉で、…うまく言い表せないけど、よく似合ってるわ」

「はは、ありがとう。二人にそう言ってもらえればうれしいよ。ところでテレジア、ボクみたいな異界人っていうのはわりとみんな知

「つてることなのかな？」

「うーん、それはないと思うわ。わたしは魔法使いだから、修行や研究の一環でそういうことを知っているだけだから、普通の人は知らないし、知りようもないはずだしね。…だから、あまり他言しないほうが良いわね。頭がおかしいと思われるか、その珍しい黒髪も相まって利用しようとされるかのどちらかだと思っわ」

「そうか…気をつけるよ」

「うん。それがいいわね。あ、もちろんわたしも他言はしないわ」

「ありがとう。なんだか世話をかけてばかりだね」

別に良いわよ。そういつて快活に笑うテレジア。…サラといい、テレジアといい、本当にいい奴ばかりだ。そう、改めて思うヒカルだった。

「情けは人の為ならずって言うじゃない。それに…」

「それに？」

「サラシ取るときに堪能させてもらったからね。ヒカルは童顔の割りに結構立派なの持ってるのね。もと男の子なら堪らないんじゃない？」

ヒカルの胸を見てにやにや笑いながら、まるで宴会のエロジジイのようないやらしくてを動かすテレジア。…訂正。テレジアはいい奴だが同時にすこし変わっているようだ。

「うむ。ヨダレを垂らしながら揉んでおったの」

「変わってるどころじゃない。それじゃ、ただの変態じゃないか…」

にやにやと笑っているテレビジンを横目に、ため息をつき苦笑するヒカルであった。

第9話：概要と思慕

この世界を構成しているのは二つの大陸と、そこにある六つの大
国らしい。二つの大陸はそれぞれ直角三角形のような形をしている
ようで、また、小学校等で使用する三角定規で言うところの60度
の角を互いに向き合わせるような位置関係になっているようだ。

六つの大国の名をそれぞれ、ナクシエ、ディヴェール、ウイスウ
インダム、ベルダナン、ゼマンキス、アンドラールといい、どの国
も600年以上の歴史があるらしいが、極めて閉鎖的で、貿易や一
部留学生の交換以外の交流はほとんどないらしい。

ヒカル達がいるウイスウインダムという国は、西側の大陸の三角
定規でいう60度付近に栄えており、広大な農地と大自然のあふれ
る緑の国である。国は21人の高位貴族が納める21の領地と王都
の合計22の区域で成り立っており、カイナはその21領の中でも
比較的北部に位置するウルガ領にある特別目立つものもない小さな
村ということだ。

ウイスウインダムは特に注目するような国産品はないのだが、そ
の豊かな大地の恩恵をつけた農業が盛んで、また、沿岸部の町や村
では質の良い魚介類が豊富にとれるらしく、中々豊かな国のようだ。

テレジアから聞いた大雑把な話をさらに大雑把にまとめると大体
このようになる。その他にも国教だの風習だの通貨だの種族だの現
王がどうだのと、さまざまな話を聞いたが、一度に聞いたこともあ
るせいかそのほとんどが耳を素通りといった感じで、あまり理解で
きなかった。なんとなく予想はしていたが、話を聞いただけではほ
とんど分からない。突き詰めて聞いていっても、もともとの知識が
ゼロなため、ますます混乱するだけだろう。

「はあ……」

柔らかい光が差し込む窓をぼんやりと眺め、かるい溜息をつく。
現在テレジアはいない。テレジアが修練に使っていた小屋に必要な荷物を取りに帰っているのだ。この診療所の医者も現在は留守。ヒカルの怪我の具合を見て、固定具の調整を行うと、そのままどこかに行ってしまった。せつかなのだと思い立ち、テレジアに聞いたことをサラの意見も聞きながらいろいろ考え込んでいたところであった。

「まいったなあ……」

なめていたわけではないつもりなのだが、少し考えが甘かったのかもしれない。

まあ、もともと聞いただけで理解できるような話ではない上に、日本に通っていた学校でも歴史や地理、世界情勢といったいわゆる“社会”の授業を大の苦手としていたヒカルには理解しづらいというのもあるのだが。

「新聞ちゃんと読んでおけばよかったかなあ……」

「ヒカル、しんぶんとはなんじゃ？」

「いろんな情報が文字の羅列で表現してあるサラリーマンの必需品……なのかな？」

「聞いてどうする。質問したのは我の方じゃぞ？」

「あはは、ごめん。ボクもあんまり利用したことなくってさ」

テレビの番組表以外は、であるが。

「まあ、よい。次じゃ、次。さらりーまんとはなんじゃ？」

「頑張ってる人だよ」

身も蓋もない言い草である。

ヒカルの意識が戻ってから、すでに二日が経っている。その間サラは今のうちに、ヒカルが口に出したり考えたことのなかで疑問に思ったことや、知らない単語や言葉等に対して質問をしてくるようになった。ちまつこく愛くるしい紅毛の犬の姿をしているサラは、その外見を裏切らず好奇心が旺盛なようで、ヒカルから聞いたことに対してさらに疑問を上乗せして質問してくる場合もあった。もつとも、その上乗せされた質問のほとんどがヒカルは答えることができなかったが。

「父さんも読んでたな…」

「さらりーまんをか？」

「どうやって読むのさ。新聞だよ、新聞」

「ほう、そちらであつたか。しかし、様々な事柄を記載した書物を熟読しているのなら、ヒカルの父君はさぞかし聡明で博学なのだろうな」

「…うん。そうだね」

朝の食卓で、新聞片手にご飯と味噌汁を食べ、コーヒーを飲んで

いた。一度味噌汁にコーヒーはないだろう、と言ったらお互いに会社も学校もあるというのに、朝から１時間ばかり説教をされたこともあったつけ。母さんはここにこして食器を洗い、兄さんは同情したような表情をしながらも我関せずといったようにさっさと身支度を整えると一人で学校に行ってしまった。

「……」

母さんは心配しているだろうか、父さんは怒っているだろうか、兄さんは寂しがってるだろうか。知らず、家族へ馳せる思い。考えないようにしようと思いつながらも、新聞の話が琴線に触れてしまったようだ。

女性になったことを知らせたらどうなるだろうか。みんな驚くだろうか。でも、驚いた後に兄さんなら案外諸手をあげて歓迎し、歓喜のあまり号泣するかもしれない。そんなことを考え、苦笑し、少しでもごまかそうとするが、一度押し寄せた感情の波はなかなか引いてはくれなくて。

自分で言い出しておいてこれでは世話ないな、と悪態を吐くも、溢れ出る感情はヒカルの瞳から陽光に煌めく思いの雫をしたたがせた。

「すまぬ、ヒカル。私の無神経な物言いで、不安な思いを……」

精神がつながっているからだろう、ヒカルの不安や家族への思いがサラにも伝わり、サラに申し訳なく思わせている。

「ん、大丈夫だよ。それにサラが居てくれるおかげでこの程度で済んでるからさ」

もし、サラが自分と居てくれなかったら、いったいどれだけ

泣いているんだろうか。

「…そうか。…我は長年人間と触れ合ってこなかったから、その感情の機微に疎い。だから、ヒカルが教えておくれ。我はそなたを傷つけるようなことは、不安にさせるようなことは、したくない。我はそなたの力になりたい」

出会ってまだ間もないというのに、ここまで自分のことを思い、支えようとしてくれているサラに、先ほど家族に思いをはせたときとはまた違う意味で泣きそうになるのを懸命に堪え、ヒカルは思いを紡ぐ。

「…その心遣いだけでボクには十分に過ぎるよ」

涙を堪えた笑顔は少々不格好ではあったが、それでも魅力を損なわない素敵な笑顔であった。

第10話：診療所にて

「む…」

病室の戸を振り返り、サラは訝しげな声を上げた。じーっと、そのまましばらく見つめ続けると、おもむろについて目をそらし、ふうと溜息を吐く。

「ん？どうしたんだ？」

涙で少し赤くなった眼をこすり、サラに問いかける。ひとしきり泣いたところですつきりとはしていなくとも、一応は持ち直したようである。

「医者先生のおかえりじゃ…」

人間でいうところの眉間あたりを自分の前足でぐりぐりと押さえ、サラはそうこぼした。

「おう！ヒカル！怪我は治ったか！？」

軋む床板をのしのしと踏みしめ、病室の戸を開け放ち、そう叫ぶ闖入者。

熊のような巨体を存分に生かして発せられる、咆哮にも似た呼びかけは病室に響き渡り、窓枠に止まっていた可愛らしい小鳥達を脱兎の如く散らせ、テレジアが置いて行ってくれた花瓶にひびを入れ、ついでにヒカルの怪我にも響きわたらせた。

「…ジンよ。寝床と医術を提供してもらっている身で恐縮だが、ち

と言わせてもらうぞ。静かにせい。ヒカルの怪我に障ったらどうする」

闖入してきた大男に呆れ気味に声をかけるサラ。しかし、その声色にはどこか諦念の色も見える。ヒカルも苦笑し、左腕をさすりながら大男に話しかけた。

「おかえり、ジンさん。…それと、骨折がそう簡単には治ると思えませんよ」

「わはははは！。そいつはすまなかったな。少し静かにするとしよう。わはははは！」

済まなかったという気も、静かにする気もまるでなさそうに高らかと笑い声を上げるジンと呼ばれた大男。一応はカイナ村唯一の医者ということなのだが、一目見ただけではそうは思えない。なにせ、2mはあるつかというその体躯に立派に蓄えられている口髭に顎鬚、ぼさぼさの短髪に極めつけはモリモリの筋肉と、どう頑張っても医者には見れず、寧ろきこりや農家と言った方がしっくりとくる風貌なのだ。

「で、日課の方はどうでした？出かけるときは随分慌ててたようでしたけど…」

「おう！大丈夫だったぞ。ミリィ嬢ちゃんとこのじいさんが倒れたって、駆けこんできた時には何かの発作かと思って慌てたけどよ、行ってみれば何のことはない、ただ重い荷物を持って腰を抜かしただけだったぜ。わははははは！まったく、ミリィ嬢ちゃんの慌てぶりにすっかり騙されちゃったな。わははははは！」

「へえ、そうですか。無事ではないにしろ、病気ではなくてよかったですね」

「ああ、そうだな。あれなら暫く寝ていれば、けろつと治るだろう！…おっと、忘れるところだった。サラ、ヒカル！お前たちに土産を預かってきたぞ」

そう言っただけでサラは手に持っていた木で編まれているバスケットをベッド脇のテーブルにどんと置いた。バスケットには色とりどりの果物が盛っており、いずれも見たことはないのだが瑞々しく美味しそうな輝きを放っている。

「ジン。預かってきたのなら土産ではなく見舞物であろう」

「わはは！そうだな！いやあ、サラはやっぱり賢いな。ただの犬とは思えないな」

「ただの犬じゃないけどね」

「うむ。そうなの」

以心伝心で会話し、心の中で苦笑しあう二人。ちなみにジンはサラが精霊ということは知っており、ただ単にものすごく頭の良いい紅毛の犬だと思っただけらしい。これはサラの説明に同席していなかったジンに対し、サラが超適当に説明したせいだという。

「説明しなくていいのかな？」

「いいのではないかと。テレジアがあえて説明しなかったのは何か意図があるのかもしれないし、それに我々はこの村のことをよく知ら

ぬからの。もし精霊といった類のものが無用な混乱を起こすのならば、賢い犬であるほうが数段良からう」

『それもそうだな。騙してるみたいで少し釈然としないものがあるけど、仕方がないか』

『うむ。そうじゃな』

無用な混乱は避けるべきだ。自分が世話になっていて、なおかつ懇意にしてくている村ならなおさらだ。ヒカルはバスケットから取り上げたリンゴのような赤い果物を眺めながらそう思う。

「それにしても、見ず知らずのボクに見舞いまでしてくれるなんて、少し変わってるなあ」

「そうじゃの。小さな村であるから排他的であると思っておったが、私の認識も間違っていたようじゃの」

そう、カイナ村には小さな村や集落にありがちなイメージの排他的な雰囲気がある。村人たちは積極的で、日々面白い話に耳をすまし、非日常に飢えているのだ。そしてそこにやってきた村外の人間がやってきたというニュース。ヒカルがテレジアによってジンの診療所に運び込まれた直後には、そのことがいわゆる御近所パワ―で殺人ウイルスをはるかに凌駕するスピードで村の端から端に行き渡った。

「わはははは！この村は別段有名なものがなくてヒマだからな。面白そうなことには皆飛びつくのが慣習だ！ヒカルを一目見るために見舞と言ってここにきた奴も相当数いたな。ありゃ、もしかしたら村の人間が全員来てたかもしれないな！」

そして、喋る犬と、幼いながらも綺麗な寝顔と、見たこともない黒い髪が醸し出す神秘的な色気に当てられて様々な噂というか憶測が飛んだ。

曰く、黒髪の少女はテメルの森の妖精で、あの紅犬は少女によって高い知能を与えられた使い魔だ。

曰く、黒髪の少女は外国の王室に名を連ねるもので、あの紅犬は少女を守るために姿を変えた騎士だ。

曰く、黒髪の少女は天界から舞い降りた巫女で、あの紅犬はその巫女とともに遣わされた天使だ。

などなど、どれもこれも突拍子もなく、何故か人外や高位の人間ということにされている。まあ、所詮は憶測での話なので、実際に敬われたり、崇められたりすることもなく、それどころか面識がないにも関わらずまるで友達感覚といったかんじで見舞いに訪れた村人もいたようだ。

「はは、まあ理由はどうあれ、見舞ってくれるのはうれしいですよ。誰からなんです？これ」

「ウィルだ。帰りに山菜と薬草を分けてもらおうと寄ったら、今日は行けないから、と頼まれてな」

「ウィル？…ウィル…ウィル…えーっと、誰だっけ？」

「あれではないか？ほれ、昨日来ていた、ヒカルと同じ年頃の」

そう言われて昨日病室に見物、もとい見舞いに来てくれた同年代だと思われる少年を思い出した。明るめの栗色の髪を短く刈り込んだなかなかに端整な顔立ちをした少年で、確かウィルと名乗っていた。

「あ、あーあの子か。…やっぱり風邪か何か引いたのかな？」

「ふむ。やっぱり、とは？」

「見舞いに来てくれて、自己紹介して、少し話をしたけど、終始顔が赤かったからさ。風邪の引き始めかなって思ってたんだけど」

「…風邪、かのう？我にはそうは見えなかったが」

「俺もそうは思わないがな。わはははは！」

「じゃあ、なんだったんだろう？」

知らぬは本人ばかりなり。ウィルと呼ばれた少年もヒカルの神秘的な魅力に当てられたくちであるようだ。しかし、悲しいかな。ヒカルがいくら外見が少女であつても中身は普通の男子学生。もちろん”そっち”の趣味があるわけではないので男に恋愛感情を持つことはしない。無念である。

「ただいま」

世間話を一時中断して、声がした方を見やる。そこには肩に荷物をかけ、腰に剣をさしたテレジアがいた。どうやら荷物を取りに行った小屋から戻ってきたようである。

「おう！おかえり。とはいってもテレジア、ここはお前さんの家じゃないぞ？わははは！」

「おかえり、テレジア」

「ふむ。戻ったか、テレジア」

三人の出迎えに頷き、今一度ただいまと答えると、テレジアは肩にかけていた荷物を床に置き、ジンに話しかけた。

「ジンさん。ヒカルもいるし、せっかくだからわたしも今日からここに住むわね。どうせ部屋もいくつか余ってるんだし、いいでしょう？」

「病室なんだがなあ。…それにヒカルは住んでるんじゃないって、入院だぞ？」

「似たようなものでしょ。それに患者が出たらわたしだって働uksi、炊事もするわよ？」

「それならいいか。お前さんの料理はうまいからな！わははは！」

うんうんと頷くジンを見て、くつくつと笑うテレジア。もともと気心の知れた仲であるようだし、断る理由もなかったと思うのだが、どうやらそれがなくともジンはテレジアによって餌付けされているようである。

「よしよし。住居は確保！これでジンさんが出かけちゃってもわたしがいるから、いつでも頼りなさいよ？ヒカル」

「うん。ありがとう、テレジア」

またしてもいろいろと気を遣わせているようだ。お礼には精一杯の笑顔でこたえよう。

「おお、これはいいものだな。わはははは！」

「ええ。そうね」

「ふむ。そうじゃな。…時にテレジアよ」

ヒカルの笑顔の魅力を再確認したサラは、テレジアの持ってきた荷物に視線を移し、問いかけた。

「必要なものと言っておつたが、いったい何を取りに行ったのじゃ？ 差し支えなければ教えてくれぬか？」

「あ、それはボクも知りたいな。まあ、もちろん、差し支えなければ、だけど」

「ええ、いいわよ。…取りに行った理由は、まずはこれのためね」

そういつて取り出して見せたのは、一冊の古びた本。おそらく題名が書いてある表紙を見せてくれているのだろうが、いかんせん言葉は通じるのだが文字が分からないため読むことができない。これからやるべきことに、文字と文法の勉強の項目を追加し、その本が何であるかテレジアに問うことにした。

「ごめん、文字が読めないから分からないや。その本は？」

「いわゆる魔導書ってやつよ。大体の魔法使いが使ってる魔法の学習書ね。もちろん、魔法のすべてが本一冊に収まるわけなんてないから、これはほんの一部なんだけれどね」

「へえ、魔法の学習書かあ。あ、じゃあさ、それに書いてある魔法でパツと怪我を治せたりは…」

「無理ね。これには魔法の基礎理論と魔方陣に使うための文字と記号についてしか書いてないもの。それに、今人間が使っている魔法で傷の治療ができるようなのは存在しないはずよ」

「そうなんだ…」

魔法という名前から想像すると、なんでもありのような気がするが、実際はそうでもないようだ。それにしても、人間が使っている魔法と言っていたが、人間以外にも魔法を扱う種族がいるのだろうか？それを聞こうと口を開きかけたところで、テレジアが魔法の話は終わり、とでも言うように次の話を始めた。

「ま、怪我なんてじっくり休んで治せばいいわよ。魔法についても後で知ればいいし、そんなことよりも、今もっと大事なことがあるわ」

「え、もっと大事なこと？」

「ええ、そうよ」

そういつて妖艶に微笑み、荷物をこそごとと漁るテレジア。ばーん、という効果音を伴って取り出されたのは小さな布きれのようなもの。…なぜか嫌な予感がする。すごく嫌な予感がする。

「…テレジア、その…それは？布巾か何か？」

願いつつ、希望的観測を述べるヒカル。

「うふふ。なぐに言ってるの。下着よ？し・た・ぎ。あ、もちろん女の子用のね？」

すべてにハートマークをつけて喋っているかのようなテレジアによつて、希望的観測は危険であることをヒカルは学習した。

広げられた布きれは履いているトランクスなどに比べて非常に小さく、それで下着の意味があるのかと叫びたい。

「ん？おう、下着の話か。では、俺は席と外すでしょう。門外漢であるし、婦女子の猥談に首を突っ込むほど野暮なことはないからな！わはははは！」

「え！？ま、まってジンさん！行かないで！」

ヒカルのとめる声もむなしく、素早く席を立て、帰ってきたときと同じように床を軋ませ、高らかに笑いながらどこか散歩へ出かけてしまうジン。ヒカルが元男であるということは知っていないため、本人としては気を使つたつもりなのだろうが、ヒカルから見れば十年來の親友に裏切られた気分だ。

「ん、猥談じゃないんだけど、さすがジンさん気がきくわね。伊達に医者はやってないわ」

「医者とか関係ないから！」

「それもそうね。それより…覚悟はいい？」

真っ赤な舌をちろりと出し、形の良い唇を舐めるテレジア。状況が状況でなかったのなら、その艶めかしさに頬を染め、生唾を呑み込んでいただろう。

「テ、テレジア、その、ボクはいいよ、下着なんて。…そうだ！それに、付け方だって知らないし！」

「ただ穿くだけよ？それに、分からないなら、わたしが手取り足取り教えてあげるわ」

墓穴を掘ったかもしれない。

「で、でも、ボクはおと…」

「中身はそうでも、身体は女の子でしょうが。それにあなた4日も体を拭くどころか下着だって替えてないじゃない。いくらなんでも汚いわよ？女の子なんだから、いざという時のために綺麗にしとかなくちゃね！」

「ない！ないから！こないから！いざという時なんて！」

いつの時代であれ、どんな世界であれ、女性用の下着というのは男にとって畏怖の対象だ。女性体になったのだから、それ専用の衣類を身につけるべきだという考え方は理解できないこともないが、当事者としては承伏しかねる！そういう思いから、這ってでも逃げようと試みるも、怪我人が健康な人間から逃れられる道理はなく、あっさりと追い詰められ、上着に手を掛けられる。

「ふふ。じつとしてなさい？痛くしないから…」

頬を赤く染め、邪悪な笑みを浮かべ、心なしか息の荒いテレジア。よく見ると眼も若干充血しており、非常に危ない。危なすぎる。

『サ、サラ！頼む！助け…！』

『うむ。がんばれよ、ヒカル。我も見守っておるからの』

『薄情者…！！』

最後の砦にもあつまり見限られ心の中で絶叫を響き渡らせるヒカル。そして、そんなことなど関係なしにヒカルをひん剥くテレジア。その日、診療所から轟いた黄色い悲鳴は、村人たちの井戸端会議の恰好の餌食となるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4015g/>

豊饒の女神

2010年10月11日02時11分発行